

都城市教育研究所

I	研究主題と副題	5-1
II	主題設定の理由	5-1
III	研究目標	5-1
IV	研究仮説	5-1
V	研究構想	5-2
VI	研究組織	5-2
VII	研究内容	5-3
1	授業構成の手順	5-3
	(1) 学習指導要領に基づいた目標の設定	
	(2) 教えることと学びとらせることの明確化	
	(3) 言語活動の設定	
	(4) 評価方法の設定	
2	個に応じた手立て	5-5
	(1) 既習事項の振り返り	
	(2) 自分の考えをもたせる手立て	
3	協同的な学習	5-6
4	家庭学習の工夫	5-7
	(1) 並行読書の推進	
	(2) 音読の奨励	
5	評価の工夫	5-8
	(1) サイドラインによる評価	
	(2) ワークシートによる評価	
	(3) リーフレットの作成による評価	
VIII	成果と課題	5-10
1	成果	
2	課題	
○	引用・参考文献	
○	研究同人	

I 研究主題と副題

思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業の展開 ～伝え合い、深め合う授業を目指して～

II 主題設定の理由

平成20年1月の中央教育審議会答申では、「知識基盤社会」の時代などといわれる社会の構造的な変化の中で、「生きる力」をはぐくむという理念はますます重要になってきていることが述べられており、児童生徒が、自ら考え、判断し、自分のすべきことを決定し、実行できることが求められている。そのような中で平成21年に実施されたPISA調査では、前回（平成18年）と比べて平均得点が大幅に上昇するなど改善傾向が見られた。ただし、その一方で依然として成績下位層の生徒の割合が多いこと、情報相互の関係を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすること（統合・解釈、熟考・評価）が苦手であることが指摘された。

平成23年度より小学校、平成24年度より中学校で学習指導要領が完全実施となった。学習指導要領では、学校の教育活動において、基礎的・基本的な知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力の育成及び学習習慣の確立等を通して、「確かな学力」を養うとともに、「生きる力」の育成を目指すことが述べられている。その改訂の柱の一つとして、思考力・判断力・表現力を育成する観点から、各教科等における言語活動を充実することが示された。児童生徒の発達の段階や各教科等の系統性を意識し、その特質を踏まえた言語活動を意図的・計画的に行うことにより、各教科等の目標達成に向けた「思考力・判断力・表現力」をはぐくむことが求められている。

本市の児童生徒は、「全国学力・学習状況調査」や「みやざき小中学校学力学習状況調査」の結果をみると、活用する問題への正答率が低く、小学校では算数科における「理由を問う問題」、中学校では「説明する力を問う問題」に課題があることが分かった。また、「自分の考えを表現すること」を苦手としている児童生徒が多いことも明らかになった。調査結果に見られる「理由を適切に考える」、「説明する」、「自分の考えを表現する」というこれらの課題はいずれも「言語活動」にかかわるものであり、授業を中心にその充実を図っていくことが、課題解決につながると思う。

以上のことを踏まえ、本研究所では、平成23・24年度、各教科において、協同的な学習に言語活動を関連付け、その充実を図ることで思考力・判断力・表現力の育成を目指す研究を進め、仮説の検証を行った。しかし、目指す授業づくりにおいて時間の枠内に収める手立てが課題として残った。そこで、合理的な指導の方法として個に応じた手立て、家庭学習の工夫、評価を加えた思考力・判断力・表現力を支える5つの要素について整理し、授業研究を中心に研究を進めていき、教科等の目標を達成することを目指していく。

このように、実践的な研究を進め、研究の成果を市内の教職員に広めていくことにより、本市の課題の解決に寄与できるのでないかと考え、本主題を設定した。

III 研究目標

本市の児童生徒の実態を把握した上で、各教科等における思考力・判断力・表現力をはぐくみ各教科等の目標を達成するために、児童生徒の発達の段階や各教科等の特質に応じた言語活動をどのように工夫することが有効なのかを、授業研究を通して究明する。

IV 研究仮説

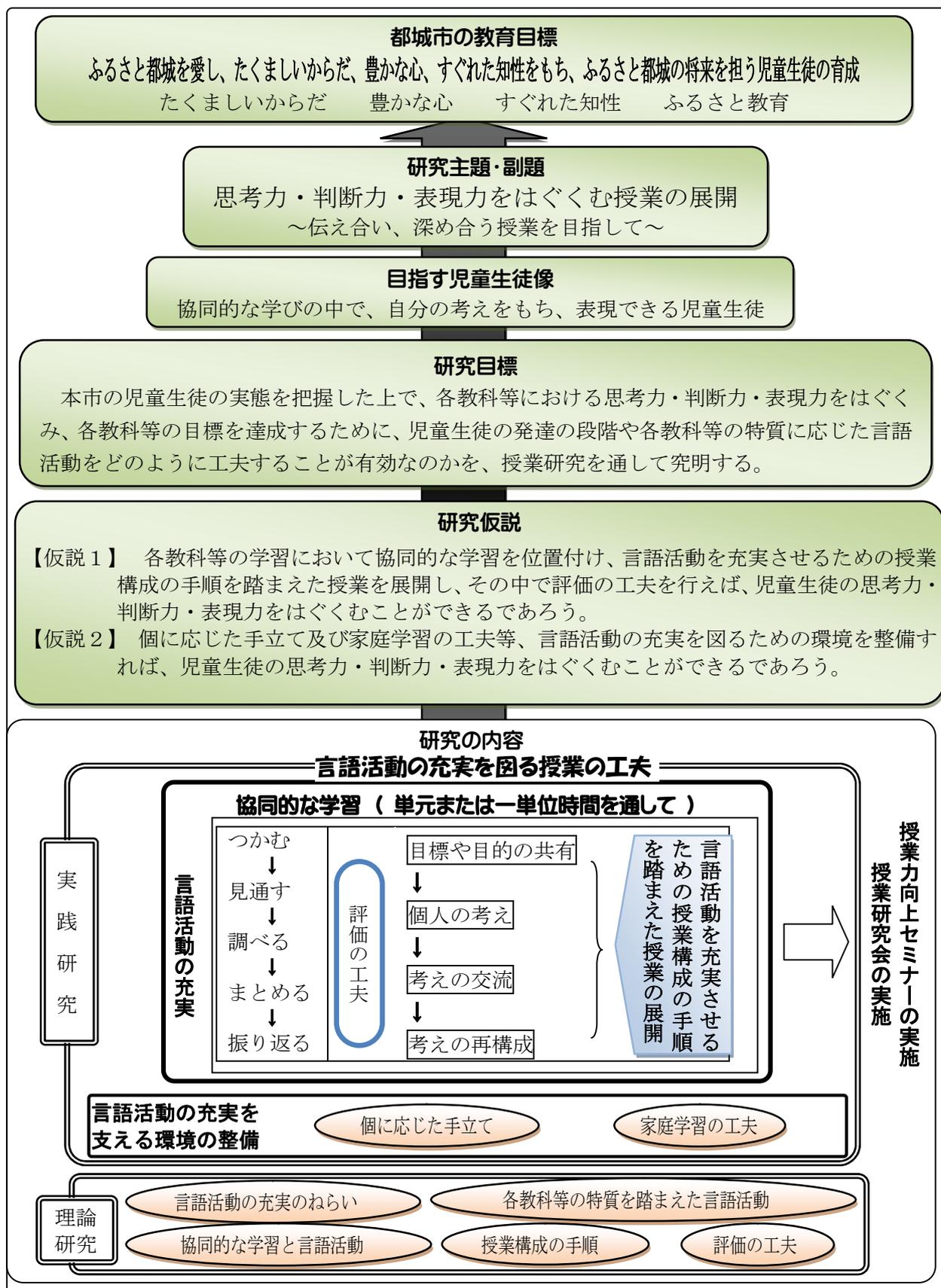
【仮説1】

各教科等の学習において協同的な学習を位置付け、言語活動を充実させるための授業構成の手順を踏まえた授業を展開し、その中で評価の工夫を行えば、児童生徒の思考力・判断力・表現力をはぐくむことができるであろう。

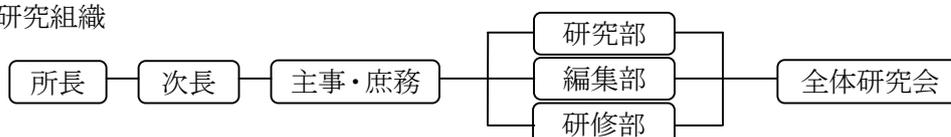
【仮説2】

個に応じた手立て及び家庭学習の工夫等、言語活動の充実を図るための環境を整備すれば、児童生徒の思考力・判断力・表現力をはぐくむことができるであろう。

V 研究構想



VI 研究組織



VII 研究内容

都城市教育研究所では、協同的な学びの中で、児童生徒一人一人が自分の考えをもち、表現できている姿を言語活動が充実している姿ととらえ、言語活動の充実を図るための学習指導の在り方について研究を進めてきた。

これらのことを研究していく中で、言語活動を充実させるために様々な手立てをとると、時間が不足してしまう、評価をどのように行っていけばよいか、という2つの点が課題として挙がってきた。

そこで、これらの課題を解決するために、教えることと学び取らせることを明確にすることで

- ① 学習指導を充実させるための授業構成の手順
- ② 個人の考えをしっかりとらせるための個に応じた手立て

- ③ 目標や目的の共有、個人の考え、考えの交流、考えの再構成の4段階からなる協同的な学習

- ④ 限られた時間を有効に使い、学習指導に時間的なゆとりを生み出すための家庭学習

- ⑤ 学習内容のつながりや指導と評価の一体化をふまえた評価

の5つを研究の柱とした。【図1】

1 授業構成の手順

「言語活動を充実させる」とは、その活動を通して何を学ばせるかということがポイントとなる。つまり指導事項について、言語活動を通して指導するということである。そのためには指導事項をいかに具体化して言語活動に組み込んで指導していくかが重要である。

そのためには【図2】のような授業構成の手順について理論として考えた。

また、指導方法、評価の仕方などをより明確にすることで、限られた時間の中でも学習効果の高い授業を行えると考えた。このような考えを基に、「小学校第4学年 理科 ものの温度と体積」の授業を通して「授業構成の手順」を検証した。

(1) 学習指導要領に基づいた目標の設定

「ものの温度と体積」は学習指導要領A-(2)に基づいて構成されている単元である。そのために本単元の目標は以下のように設定した。

学習指導要領A-(2)

金属、水、空気と温度の「金属、水及び空気を温めたり冷やしたりして、それらの変化の様子を調べ、金属、水及び空気の性質についての考えをもつことができるようにする。」

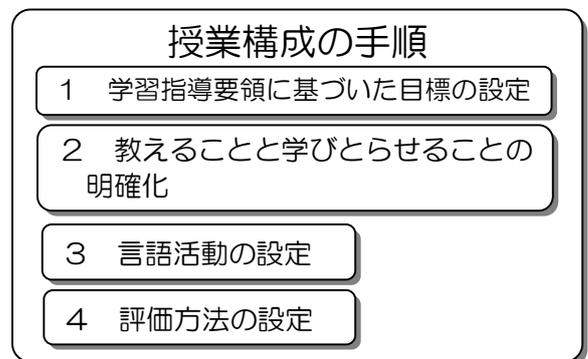
ア「金属、水及び空気は、温めたり冷やしたりするとその体積が変わること。」

本単元の目標

ア 温度による空気の体積の変化に興味・関心をもって追究することができる。



【図1】研究の柱



【図2】授業構成の手順

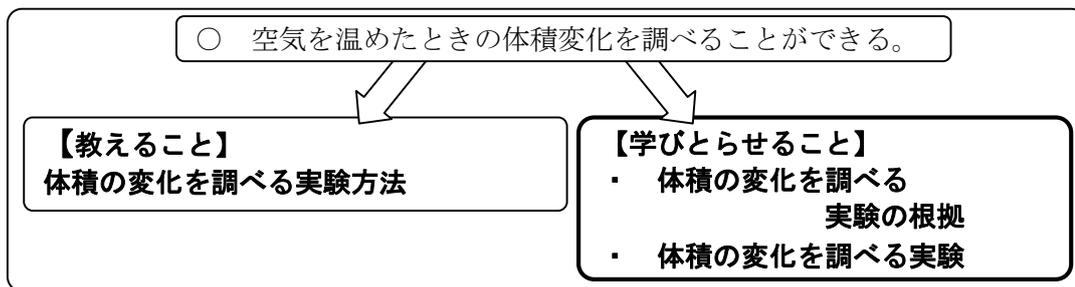
- イ 温度の変化と空気・水・金属の体積の変化と関係付けて実験方法や自分の考えを表現することができる。
- ウ 加熱器具などを安全に操作し、金属、水及び空気の体積変化の特徴を調べる実験を行い、その過程や結果を記録することができる。
- エ 空気・水・金属は温度によって体積が変化し、空気・水・金属の体積の変化の大きさは違うという考えをもつことができる。

また、指導事項については第1次に「空気の温度と体積」、第2次に「水の温度と体積」、第3次に「金属の温度と体積」と分割して取り扱うこととした。さらに、第1次においては以下のように3時間扱いで指導計画を立てた。

第 一 次	温めた容器の栓が飛び出したり、石けん水の膜や風船が膨らんだりするのはなぜかを考えさせることで、予想を確かめる実験の計画を立て、空気を温めたときの体積の変化を調べられるようにする。(2時間)
	予想と結果を比べて、分かったことを話し合わせることで、空気の温度変化と体積の変化を関連付けて考えさせ、空気は温めたり冷やしたりすると、その体積が変わることを理解させる。(1時間)

指導計画に基づいて行った検証授業第1次、1時間目においては本時の目標を以下のように設定した。

- a 空気を温めたときの体積変化を調べることができる。 (観察・実験の技能)
- (2) 教えることと学びとらせることの明確化
 教えることと学びとらせることを明確にするために、本時の目標をさらに分割して指導事項を【図3】のように整理した。



【図3】 整理した指導事項

本時は、温度による空気の体積変化の実験を通して空気の体積が大きくなったり、小さくなったりすることを解明していくための導入部分にあたる。そのため、児童の予想を確認するための検証実験は、根拠を基に考えさせたり実験を行わせたりすることが効果的であると考えた。さらに、今後の学習へのつながりも考え、根拠を明らかにしながら科学的な思考をさせることが最重要であると考え、「根拠を基に予想を確認する実験をする」ことを学びとらせることに位置付けた。

また、実験方法については、各実験器具を組み合わせた実験の経験が少ない点や、根拠を基に予想を確認する実験を考えることに重点を置くという点を考慮し、本時においては教えることに分類した。そうすることで、学習内容を一単位時間内で指導することができた。

- (3) 言語活動の設定
 言語活動を設定するうえで大切なことは、言語活動はそれぞれの教科の目標を実現するための手立てであるという点である。大事なことは各教科等の目標と指導事項であり、それをより効果的に学習させるための手立てとして言語活動を設定することである。
 そこで本時においては、根拠を基に、示された実験方法の中から適切な実験法を児童一人一人に考えさせる過程が目標達成の重要なポイントとなる。そのため、言語活動は根拠を基にどの実験方法が適切かを思考させる段階に設定した。その結果、重点的を置いた指導事項

について、児童にしっかりと思考させることができた。

(4) 評価方法の設定

理科の学習の中での思考・判断・表現力については、科学的な思考・表現力であり、本時においては、「実験方法について根拠を基に考えることができたか」である。このことを言語活動の様子だけで評価していくのは難しい。そこで、話し合い活動に加え、実験方法や根拠を書き込むワークシートを用意することで、児童の思考や考えの変容が目に見えて評価しやすい可視化された評価方法を設定した。その結果、児童のワークシートから、児童一人一人の思考の変容の過程を把握し、評価することができた。

このような手順を踏んで授業を構成することで、言語活動を効果的に取り入れながら、指導内容の重点化を図ることができた。

2 個に応じた手立て

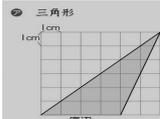
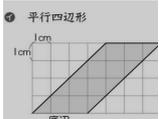
言語活動を協同的な学習と関連付けながら授業を進めるためには、児童生徒一人一人に自分の考えをもたせることが大前提である。しかし、現実的には自分の考えをもたせるための支援が必要な児童生徒も少なくない。そこで、本研究においては個人の考えをもつことが苦手な児童生徒に、思考のきっかけを与えたり、思考の方向性に気付かせたりする手立てを個に応じた手立てと位置付けた。

個に応じた手立ては、思考・判断の過程や変容、表現などを基にした単元及び一単位時間の評価を基に、個に応じた手立てが効果的・効率的であったかなどを見直し、工夫・改善することで指導と評価の一体化を図ることができる。しかし、自力で思考することが苦手な児童生徒に対し、言語活動を通して考えさせたいことをイメージさせることができるような手立てになり得るかどうかには留意する必要がある。このような点に留意し、「小学校第5学年 算数 面積」の授業を通して「個に応じた手立て」の検証を行った。

(1) 既習事項の振り返り

第5学年の「面積」では、主に公式を導き出したり多様な考え方で図形の求積の仕方を考えたりしていく学習が中心となる。そのため、既習事項である正方形・長方形の求積の仕方や垂直の概念をしっかりと理解しておく必要がある。しかし、実際には忘れてしまっていたり、既習事項を新しい学習にうまく活用したりすることができない児童もいた。そこで、単元学習前に公式や垂直の概念を確認する時間を設定した。また、授業においても毎時間の学習内容に合わせた既習事項の振り返りを行った。さらに、既習事項をまとめた掲示物を児童が確認しやすい場所に掲示し、いつでも確認ができるようにした。

このような工夫を取り入れたことで、本時学習に必要な思考のきっかけを作るとともに、児童のレディネスを揃えることができた。

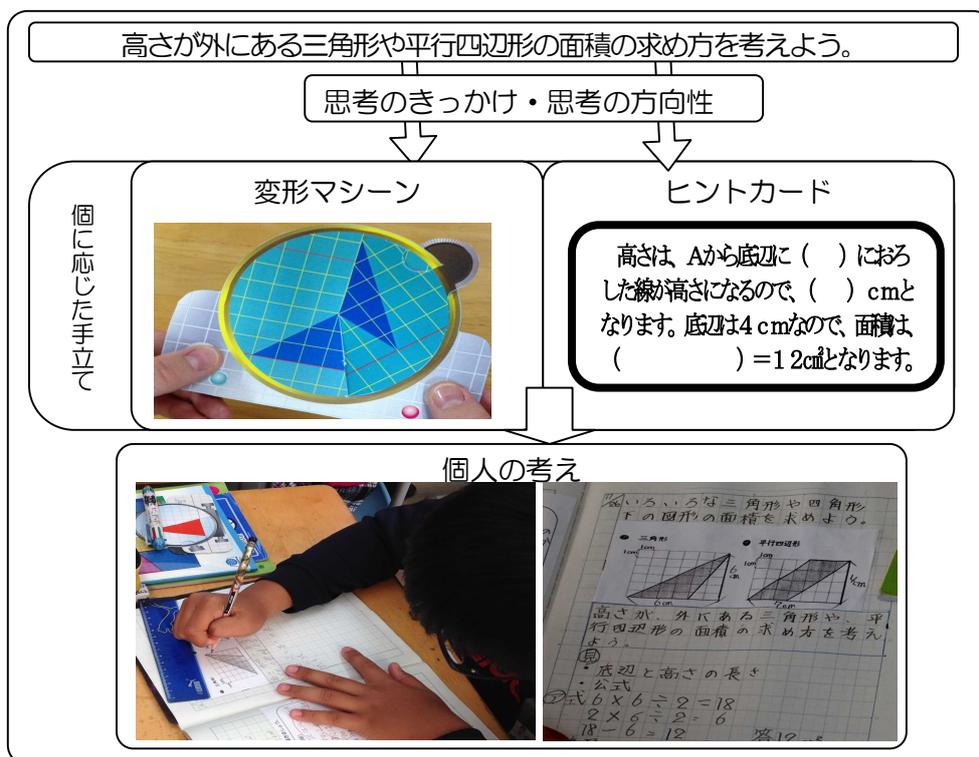
段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点及び評価
つかむ・見通す	1 既習事項を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 掲示資料を使い、前時までの学習内容を想起させる。特に、三角形・平行四辺形の面積の公式や、底辺と高さの概念について確認する。
	2 本時の学習問題を知る。 下の三角形・平行四辺形の面積を求めよう。	
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>● 三角形</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>● 平行四辺形</p> </div> </div> 3 本時のめあてを確認する。 高さが外にある三角形や平行四辺形の面積の求め方を考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今までの学習と何が違うのか児童に考えさせる。 ○ 高さや底辺は全員で確認し、色を付けるなどして掲示する。 ○ 今までの学習を思い出しながら、底辺と高さを探すことや公式が使えるかどうかを出させる。

(2) 自分の考えをもたせる手立て

本時学習においては、児童一人一人に高さが図形の外にはみ出す場合の三角形や平行四辺形の面積の求め方について個人の考えをもたせることが必要である。そのため、苦手な児童でも個人の考えがしっかりともてるように、既習事項の書かれたヒントカードや教科書の付録である変形マシンを活用した。【図4】

変形マシンを操作する中で、高さは外にあっても中にあっても公式を使って面積を求めることができることに気付いた児童や、ヒントカードの空白を埋めることで面積の求め方を自分なりに考えることができる児童も見られた。この手立てをとることで、次の段階のペア学習を効果的に行うことにつながった。

その結果、学習のめあてに対し、どのように考えていけばよいかという思考の方向性に気付かせることができ、児童全員に自分の考えをもたせることができた。

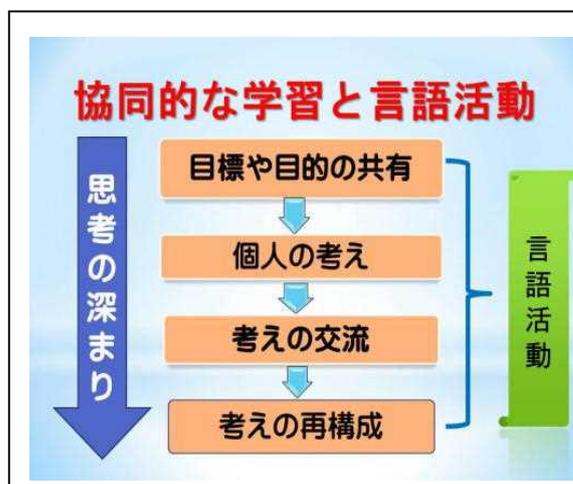


【図4】個に応じた手立て

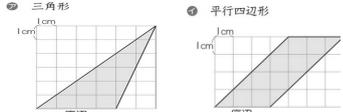
3 協同的な学習

協同的な学習とは、集団における学習者が、共通の目標や目的をもち、それぞれの考えを基に、お互いの考えを交流させながら、新しい考えを主体的に構成し、課題を解決したり、目標を達成したりしようとする学習活動のことである。

本研究においては、協同的な学習を、単元全体や一単位時間に位置付けることで言語活動が充実し、児童生徒一人一人が思考・判断・表現しながら単元及び授業の目標を達成することができる考えた。このような考えを基に、「小学校第5学年 算数 面積」の授業を通して「協同的な学習」の検証を行った。



【図5】協同的な学習

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点及び評価
つかむ・見通す	1 既習事項を確認する。 2 本時の学習問題を知る。 下の三角形・平行四辺形の面積を求めよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 掲示資料を使い、前時までの学習内容を想起させる。特に、三角形・平行四辺形の面積の公式や、底辺と高さの概念について確認する。 ○ 今までの学習と何が違うのか児童に考えさせる。 ○ 高さと底辺は全員で確認し、色を付けるなどして掲示する。
	3 本時のめあてを確認する。 高さが外にある三角形や平行四辺形の面積の求め方を考えよう。 4 見通しをもつ。 ○ 解決方法の見通し ・ 底辺と高さ・公式	<ul style="list-style-type: none"> ○ 目標・目的の共有 問題を全員で確認し、学習の流れや考え方・解き方を全員で共有する。 ○ 今までの学習を思い出しながら、底辺と高さを探すことや公式が使えるかどうかを出させる。
調べる	5 自分なりの方法で面積を計算で求める。 (1) 三角形 式 $4 \times 6 \div 2 = 12$ 12 cm^2 高さは、Aから底辺に垂直におろした線が高さになるので、6 cmとなります。底辺は4 cmなので、 $4 \times 6 \div 2 = 12 \text{ cm}^2$ となります。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 式だけでなく、説明も書かせる。 ○ 1つの方法が見付けられた児童には他のやり方がないかどうか助言する。 ○ 自力解決が難しい児童には、ヒントカードや三角形マシンを基にして解ける ○ 個人の考え 自分なりの解き方で、問題を解き、解き方の説明を簡潔に書いていく。
深める	6 少人数のグループをつくり、どのように考えたか説明する。 7 全体場で発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 友達の考えを参考にしたり間違いに気付いたりした場合は、青ペンで書き加えたり ○ 考えの交流・再構成 小集団で自分の考えを伝え、意見を交流させることで新たな考えを生みだし、課題を解決していく。

検証授業では、個に応じた手立てによって生み出された個人の考えを基に、ペアや全体で考えを交流させることができた。児童は、協同的な学習の中での考えの交流を通して、自分の考えを深めたり、誤答に気づき考えを訂正したり新しい考えを導き出したりすることができた。

4 家庭学習の工夫

児童生徒に思考・判断させるための個人思考・集団思考の場を設定すると、学習内容が単位時間の中に収まりきらず、時間が不足してしまうことが少なくない。そこで、学習したことを生かして個人思考する場面や考えの再構成、習熟問題などを計画的に家庭学習に位置付けることで、家庭学習と授業の関連を図りつつ、時間的な効率を高めることができると考えた。

児童生徒が家庭学習を授業と関連させて取り組めるようにするためには、課題に取り組ませるための基礎・基本は、授業でしっかりと作っておくことが前提である。そのためには、単元指導計画に関連付けて家庭学習の計画も立てる必要がある。その際、個に応じた手立てをとることが大切である。このような考えを基に、「小学校第6学年 国語 未来に生かす自然のエネルギー」の授業を通して「家庭学習の工夫」の検証を行った。

(1) 並行読書の推進

国語科において、単元を貫く言語活動を指導する上で効果的な活動が並行読書である。これまでの読書指導は、単元の学習が終了した後に発展読書を行うことが多かったが、並行読

書は単元の学習と並行して読書を行う。そのため、教材文と自分の課題を比較しながら読書を進めることができ、単元を貫く言語活動を常に意識した学習へとつなげることができるというメリットがある。

児童が疑問に感じたことを進んで調べることができるように、資料や本の選定をするといったような言語活動を支える環境の整備も必要である。

検証授業においては、児童の興味・関心を高め単元を貫く言語活動である「リーフレット作り」につなげるために、単元の学習当初から家庭での並行読書に取り組みさせた。その際、教室の掲示板に再生可能エネルギーについての資料を掲示し、環境に関する書物や図鑑、読み物資料等を多く紹介した。【写真1】

その結果、学習に対する関心を高めながら単元の学習を進めることができた。また、これまでの学習と比べて、多くの知識をもった状態で学習に取り組ませることができたため、個人の考えをもつことのできる児童が増え、考えの交流を活発に行わせることができた。

(2) 音読の奨励

従来の国語の授業では、単元を通して一単位時間の中に音読の時間を位置付けてきた。しかし、言語活動の充実を図るための手立てを学習の中に位置付けるためには、音読の時間を省くことができると考え、教材の音読に関しては単元の導入で読み方の指導を行い、家庭学習で取り組ませることとした。

家庭学習に音読を位置付けたことで時間的な余裕を生むことができた。その時間を有効に活用し、個人思考や集団での伝え合い活動、考えの再構成などの時間を十分に確保することができるようになった。

「読みに始まり読みに終わる国語科学習」というこれまでの定説を覆すことに対して抵抗があったものの、言語活動の充実を図る時間が十分に確保されたことで、児童の思考をさらに深めることができた。

5 評価の工夫

評価は単元及び一単位時間の目標が達成されたかどうかを評価することが重要である。その評価を基にし、取り入れた言語活動が充実していたかどうかを評価することができる。

授業構成の手順を基に授業を構成し、単元及び一単位時間の目標を達成し得る言語活動を設定する。目標に対する達成度を評価することで、言語活動が充実していたかを評価することができる。また、改善点も明らかになり、指導と評価の一体化を図ることができる。

その際、児童生徒の言語活動を可視化しておくことで、思考・判断の過程や変化、どのように表現したかを把握することができる。可視化された言語活動を基に、単元及び一単位時間の目標に基づいて児童生徒の思考力・判断力・表現力も評価することができる。このような考えを基に、「小学校第6学年 国語 未来に生かす自然のエネルギー」の授業を通して「評価の工夫」の検証を行った。

(1) サイドラインによる評価

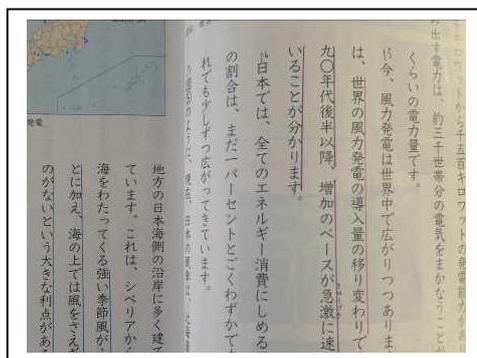
児童の思考の過程や変容を評価する上で、児童の思考の過程を可視化しておくことは大変効果的である。検証授業においては、教材文を読み取る際に重要な語句にサイドラインを引



【写真1】再生エネルギー紹介コーナーの様子

かせる活動を行った。

その際、個人の考えの部分には赤色で、友達との考えの交流の中で考えが変わったり新たに気付いたりしたことを青色で引かせるようにした。色を分けて児童の考えの変容を可視化したことで、教科書を一目見ただけでどの児童がどのように考えの再構成を行ったかを把握し、評価することができた。【写真3】

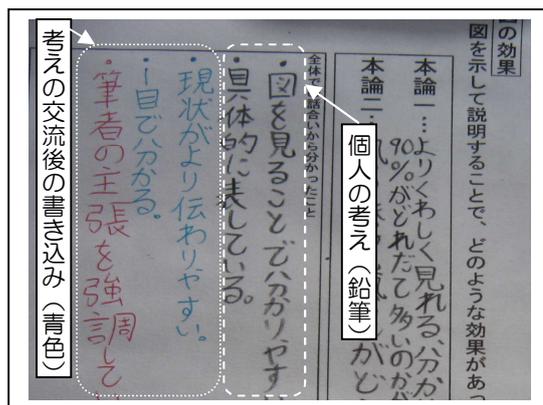


【写真3】色分けされたサイドライン

(2) ワークシートによる評価

サイドラインと同様に、学習で児童が考えを書き込むワークシートも、自分の考えと学習後に気付いたことや新しく分かったことを色分けしてまとめさせた。

単元当初は、自分の考えを時間内にまとめることができず、友達の考えをそのまま書き写す児童が多く見られた。しかし、学習が進むにつれて、自分の考えを鉛筆で書き、友達の考えと比較して、分かったことを青色で書き加える児童の方が多くなってきた。学習中も机間指導を通して一人一人の思考の流れを見ることに役立つ上、授業後に回収して、一人一人の理解の状況を確認することもでき、児童一人一人の学習状況を評価する上で大変有効であった。【写真4】



【写真4】思考の再構成が可視化されたワークシート

(3) リーフレットの作成による評価

国語科では「単元を貫く言語活動」を位置付けることが必要である。単元を貫く言語活動を設定する上で最も大切なことは、どのような力を身に付けさせたいのかを明確にすることである。

本単元においては、言語活動としてリーフレットの作成を設定した。単元の計画は3段階で構成し、第1次では言語活動を示す際に、目的・相手・場面等も伝え、学習意欲を高めた。第2次では、第3次の言語活動で活用する力、つまり身に付けさせたい力をしっかりと指導し習得させることに重点を置いた。第3次では、児童が言語活動に自力で取り組み、思考力・判断力・表現力の発揮の場となるようにした。習得と活用を意識し、第2次と第3次につながりをもたせた構成にすることで、言語活動の充実が図ることができた。

評価においては、児童が作成したリーフレットを活用した。リーフレットは「文章構成を意識して、現状・課題・解決策の順に見出しをつけてまとめる」、「伝えたい内容が強調できる資料や、読み手がよりイメージをしやすくするための資料を示す」など第2次の学習で学んだことを児童がどれだけ理解し、自分のリーフレットに生かしているかを確認できた。また、リーフレットのまとめ方を基に児童の関心・意欲・態度も含めた評価をすることができた。

VIII 成果と課題

1 成果

- 授業構成の手順を基に、教えることと学びとらせることを明確にしたことで、時間的な効率を高めながらより効果的な指導を行うことができた。その結果、言語活動を充実させるための時間を確保することができ、言語活動を通して思考力・判断力・表現力を高めることができた。
- 個に応じた手立てとして、教室内の掲示物を工夫したりヒントカードを活用したりして、レディネスを揃えることができた。その結果、課題に対して学級の児童生徒全員が自分の考えをもつことができた。また、その後の考えの交流が活発になり、児童生徒が自分の考えを確認したり自分の考えに付け加えをしたりするなど、伝え合い、深め合う中で思考力・判断力・表現力の高まった様子が見られた。
- 学習したことを生かして個人思考する場面や考えの再構成、習熟問題などを単元指導計画に基づいて計画的に家庭学習に位置付けることで、家庭学習と授業の関連を図りつつ、授業における指導の時間的な効率を高めることができた。その結果、言語活動を充実させながら、指導事項を協同的な学習を通してより確実に理解させることができた。
- 平成23・24年度は各教科において、協同的な学習に言語活動を関連付け、その充実を図ることにより、思考力・判断力・表現力の育成を目指す研究を進めてきた。さらに本年度は個に応じた手立て、家庭学習の工夫、評価の工夫を加えた5つの要素について整理し、授業研究を中心に検証を進めることにより研究目標の達成に資することができた。

2 課題

- 言語活動をより一層充実させた計画的な学習指導を行うためには、指導者が児童生徒に教えることと学びとらせることを明確にしなければならない。そのためには、単元や学習の目標に基づいて教材分析を行い、時間対効果の高い単元計画や授業計画を立てる必要がある。

○ 引用・参考文献

- 文部科学省(2008. 3)「小学校学習指導要領」 東洋館出版社
 文部科学省(2008. 8)「中学校学習指導要領」 ぎょうせい
 文部科学省(2010. 12)「言語活動の充実に関する指導事例集 小学校版」
 文部科学省(2011. 5)「言語活動の充実に関する指導事例集 中学校版」
 文部科学省(2008. 3)「小学校学習指導要領解説 国語編」 東洋館出版社
 文部科学省(2008. 3)「小学校学習指導要領解説 算数編」 東洋館出版社
 文部科学省(2008. 12)「小学校学習指導要領解説 理科編」 日本文教出版
 高木展郎編(2008. 11)「各教科等における言語活動の充実」 教育開発研究所
 文部科学省(2013. 7・8)「初等教育資料 NO901・902・903」 東洋館出版社
 日本教育評価研究会(2009. 7)「指導と評価」 図書文化

○ 研究同人

都城市教育研究所所長	福元 富士雄	都城市立祝吉小学校	比江嶋 哲
都城市教育研究所次長	久保田 賢一郎	都城市立沖水小学校	中島 寛
都城市教育研究所主事	後藤 世志哉	都城市立江平小学校	鍋西 幸治
都城市教育研究所主事	多良 久	都城市立西小学校	久場 智裕
都城市教育研究所主事	川島 博嗣	都城市立富吉小学校	佐野 誠
都城市教育研究所主事	永富 雅樹	都城市立木之川内小学校	林田 由紀
都城市教育研究所主事	寺田 菜穂子	都城市立東小学校	山口 耕
都城市教育研究所主事	堀 博文	都城市立高城中学校	楯岡 秀人
都城市教育研究所庶務	小岩屋 美香	都城市立高崎小学校	植野 大郎
		都城市立沖水中学校	河野 由佳